【研究協議】

研究の視点

（１）　安全な受け身を習得するために、互いに協力し合いながら活動することができたか。【生徒理解力】

（２）　グループ内で互いの課題等を確認し練習することで、練り合い高め合うことができたか。【授業実践力】

自　　評

これまで、「安全に留意した指導方法及び学習展開」と「生徒の自主的な動き」を意識して、柔道授業づくりＷＧを中心に研究を進めてきた。前時までは、後ろ受け身と横受け身を重点に、座った状態で相手と向き合い、手で押し合って受け身をとるといったゲーム感覚の練習をしてきた。本時は、相手の崩し（前さばき）からの受け身の学習が中心となり、崩しからの受け身は初めての活動になる。これまでの安全で正しい受け身を習得することはもちろん大切だが、「受」が安心して受け身をとるための「取」の体さばきと、引き手を重視した両手の使い方に気付き、お互いが安心して活動することができる学習展開を目指した。

自身も柔道に精通しているわけではないが、「事故がないように」、そして、生徒の感想にあった「投げられたけど、楽しかった。気持ちよかった。」等の生徒の言葉を大切にしながら、今後も和気あいあいと活動し、押さえるべきところは押さえて学習を展開していきたい。

グループ協議

○　生徒の生き生きとした姿が印象的だった。生徒同士が声を掛け合って協力して活動する様子から、これまでの学習訓練への取組が分かる。また、生徒の学ぶ意欲が伝わり、それに応える教師の姿があった。生徒の相手を尊重する態度（思いやりの心）が伝わってきた。

○　技能の習得ばかりに目がいきがちになるが、視聴覚機器を使ったグループ活動や学習カードからつまずきのポイントを明らかにする等の工夫が、思考力・判断力を伸ばすのに大変効果的であった。

○　視聴覚機器を使った活動では、教師が必要最低限の説明にとどめ、生徒は、映像から得た情報をグループで繰り返し確認しながら活動していた。生徒の「気付き」を大切にした学習展開であった。生徒を的確に見取り、考えさせる教師の声かけがあった。また、生徒のつぶやきからその言葉を吸い上げ、全体に投げかけていた。グループから全体、そして全体からグループへ返すことで、自分だけでなくグループ内の課題にも気付き、それを改善していくことができていた。

○　安全に配慮した授業展開が行われていた。袈裟固めをかける際、首に手を回さず、脇から手を回すことで、頸椎への負担が軽減され、お互いが力一杯攻防する様子が見られた。引き手を重視し両手を確認することで、より安全性が高まった。

●　より安全性を重視した学習を展開するために、身に付けているもの（眼鏡やヘアピン）の確認や女子生徒の髪を束ねる等の配慮を学習の初めに徹底させたり、受け身の未熟な生徒に関しては、もう少し段階を追ってポイントを指導したりすることが大切ではないか。

指導助言　【松山大学法学部　准教授　樗木　武治】

柔道による重大事故が後を絶たない。そこで今回は、今日の授業と深く関係する安全面について「寝技での事故」と「乱取りでの事故」の２つの視点で考えていきたい。

今日の授業で、寝技の攻防があった。袈裟固めをする際、抑え込んだ生徒が右手で首を抱えずに脇に手を刺した場面があった。研究協議でも質問があったが、実際の授業の中で「投げ技が危ない」とよく言われ、危ないから寝技の時間を多くとる傾向にあるが、寝技においても「体力差、筋力差、体重差」を考慮して授業を行わないと首への負担がかかり、事故につながる可能性がある。例えば、首を抱える袈裟固めで抑え込んだ際、首を締め上げる動作をすると首への負担がかかり頸椎を痛めることになる。慣れてきて本気の攻防になると、一層首への負担がかかる。体力のない１年生の場合は、相手が本気で締め上げて逃げ合う攻防を繰り返すと首への負担がかなりのものになると考えられる。そこで今日の授業のように、脇に手を刺す崩れ袈裟固めにすると、これまでのような首への負担は軽減される。柔道の楽しさを実感させようと早い段階で寝技の攻防を取り入れるケースが多いが、今日のように脇に手を刺す崩れ袈裟固めを教えることでけがや事故を防ぐことにつながる。

抑え込み方を教える際、最初に袈裟固めを扱う場合が多いが、相手のことを意識した活動を心掛けることが大切となる。まず、首を抱えた袈裟固めで危険性を確認する。その後、脇に手を刺す崩れ袈裟固めを扱うと「首を締め上げると危ない」ということを意識した活動が期待できる。体格差については、今日の授業ではあまり感じられなかった。抑え込みの形を確認する場合は心配ないが、全力での攻防をするとなるとやはり危険を伴う。体格差についても何らかの形で意識させなければならない。

今年度２件の死亡事故と３件の重大事故が起こっており、その内３件が中学生の事故である。このような事故を防ぐために今日の授業を振り返ってみる。腰をかがめた位置からの後ろ受け身は、ほとんどの生徒ができていたが、中には多少後頭部を打っている生徒も見られた。柔道の授業を開始して５時間目ということから考えるとよくできていると感じた。ただ、立った姿勢からの受け身の場合は、不安になる生徒が多かったように思う。もう少し段階を踏んだ指導の必要性を感じた。前進して受け身をとる場面は、移動しながらということもあり、畳をたたくタイミングがとりづらいことが分かる。横受け身の場面で畳をたたいていない手を上に伸ばす動作は、「取」が引き手を引いていることを想定した動作で、「取」が引き手を引くことを意識させることにつながる。映像を見てもらうとよく分かるが、両手を離した投げは、長年柔道をしてきた大学生でも危険に感じる。一方、投げ技を施した後に引き手に釣り手を添えて引き上げる動作は、見ていても安心感があり、「受」も安心して受け身をとっていることが分かる。もし、頭を打ったとしてもこの２つでは安全性に大きな違いがある。ここが今日の授業の安全面でのポイントとなる。このような映像や実際の投げ込みの様子を見せることができれば、両手で引っ張り上げることの重要性を生徒に理解させることができる。

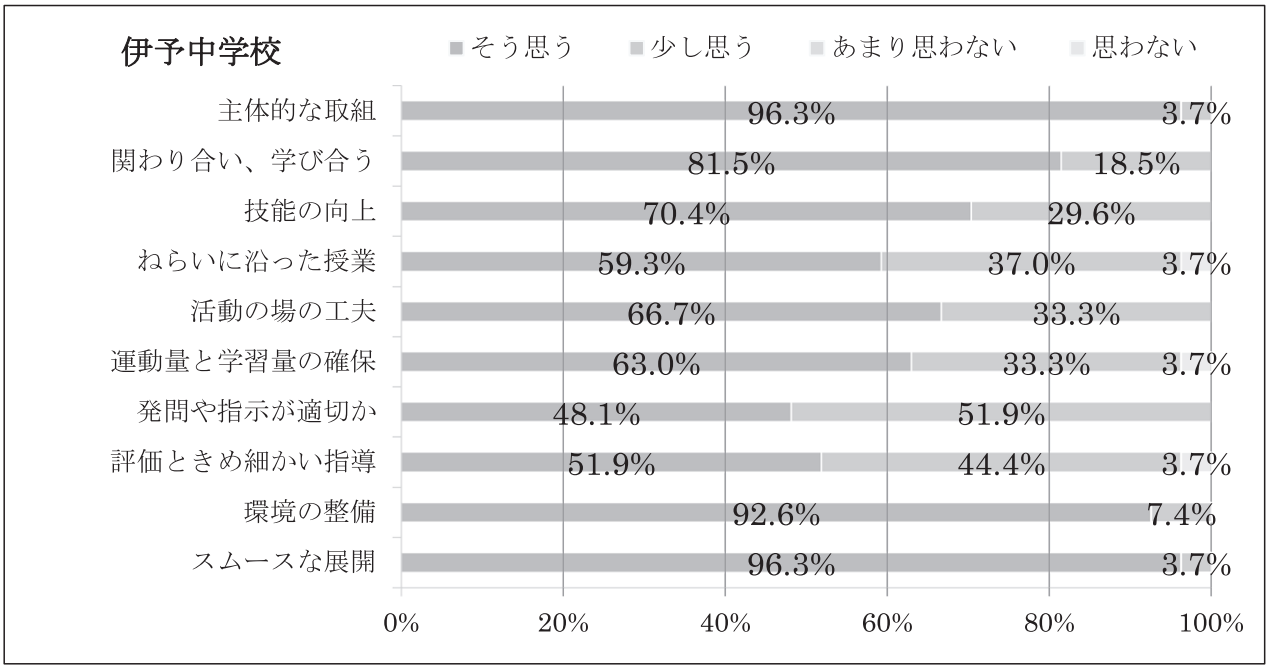
今後、投げ技の練習をする際、このような手の動きを必ずするよう意識させるためにも、横受け身の段階から今日の授業のような段階から始めることが大切となる。

受け身の練習段階で、「取」の重要なポイントとなる「手を添える」ことが大事だということを確認できるかどうかが今後の学習に影響してくる。投げ技を教える段階で、「引き手を引きなさい」「手を添えなさい」と指導しても遅い。受け身を指導する段階から取り上げていくことが大事である。

投げ技の指導では、受け身が上手にできない相手に対して、相手が頭を打たない投げ方ができるようになることを意識した指導をしてほしい。引き手やつり手の使い方やつま先の位置、方向を意識した指導が基本になる。今日の授業を見ても分かるように、受け身が上手にできる生徒とそうでない生徒、体力や技能に差がある生徒がいる。受け身が上手にできない生徒に対しても頭を打たないような投げ方、両手の添え方を意識した授業を展開することで、「危ない」とか「怖い」といった柔道の学習に対する意識が薄れるとともに、事故を未然に防ぐことにつながる。それが、安全面に配慮した指導となる。また、今日の授業のように「話合いの場をもつ」「ＩＣＴ機器を活用する」といった時間をもつことは、生徒に「気付かせる」「意識させる」ために、大変効果的である。

柔道は「柔術」が起源であり、危険を伴うことが当たり前と思われているが、今日の授業のように、事故が起きることを指導者が想定して安全面の指導や配慮をし、事故を防止していこうとする工夫が必要である。「やってはいけない」ことや「しなければ大丈夫」ということを知るだけでは、十分ではない。相手を尊重することや相手を配慮する気持ちを授業の初めから生徒に伝えることができれば、重大事故を防ぐことにつながる。その気持ちをもたずに、「勝ち負け」にこだわった授業を展開すると生徒自身が感情や技をコントロールできなくなり、授業としての柔道が成立しない。

今日の授業は、袈裟固めでの首への配慮や両手を添えた受け身の練習等、安全面に対する工夫が見られた。そしてこの工夫は、相手を尊重し、配慮した活動とも言える。



平成２８年度中学校『武道・ダンス授業づくり研究会』アンケート集計（伊予中学校）

Ⅰ　【授業参加者によるアンケート】

（単位：人）

質問項目	そう思う	少しそう思う	あまり思わない	思わない
生徒は、学習に主体的に取組むことができていた。	26	1	0	0
生徒同士で関わり合い、学び合う学習ができていた。 ・所属感を感じ、安心して自らの考えを表現できる雰囲気がある。	22	5	0	0
技能の向上が見られた。 ・動きのコツややり方がわかった。できなかったことができるようになった。	19	8	0	0
本時のねらいが明確で、ねらいに沿った授業が展開されていた。	16	10	1	0
活動の場の工夫ができていた。	18	9	0	0
運動量や活動量が十分に確保されていた。	17	9	1	0
教師の発問や指示の言葉が適切であった。	13	14	0	0
適切な評価がなされ、個に応じたきめ細やかな指導がなされていた。	14	12	1	0
学習環境が整備されていた。《いきいきと節度ある態度》	25	2	0	0
思いやりのある態度でスムーズな授業展開がなされていた。	26	1	0	0

Ⅱ　今日の公開授業・研究協議等から、どのようなヒントを得ることができたか。

- 学習訓練がよくできている。
- 生徒の学ぶ意欲が伝わってくる。また、それに応える教師の姿があり、すばらしい。
- 生徒のワークシートからつまずきのポイントが明確になった。
- 安全面について今一度考える機会となった。安全面に関して段階を踏んだ授業が行われていた。
- 生徒の生き生きとした姿が印象的だった。日頃の授業から伊予中の生徒のように一生懸命に行う生徒を育てていきたい。
- いろいろな映像（繰り返し）や資料を活用することで、生徒たちのやる気も高まると思う。
- 教師の言葉かけ・意見の吸い上げ・・・全てを指示せずに生徒にまねをさせることで「気付き」（気付かせる）を大切にしている。
- 今後の学習活動で必要な動きを補強運動の中で身に付けていたので、大変参考になった。
- 日頃の生徒への指導や教師の態度の大切さを感じた。
- 相手を尊重する態度（思いやりの心）の大切さが伝わってきた。
- いかに自分の課題に気付き、それを改善していくことができるか、その声かけや指導方法について大変勉強になった。
- Ｔ２の役割の大切さを実感した。（安全面、活動に対する細やかな配慮）
- 授業に対して緊張感をもって臨むことができていた。また、緊張感がほぐれる場面があったことを考えると教師と生徒の信頼関係が構築されていることが分かる。
- 技能習得ばかりに目がいきがちになるが、思考力・判断力を伸ばしていくことの大切さがよく分かった。

Ⅲ　指導助言での参考内容

- 安全面を考えた指導の重要性が明確になった。
- 相手に対する配慮を最初に意識させることの重要性。（危険を伴う学習だからこそ）
- 受けが安全面を意識して受け身を行うことはもちろん、取りの安全面に配慮した正しい投げを理解することの重要性に気付かされた。

・　約束練習中の重大事故の話から、どの場面でも安全面に配慮した指導や活動場所を意識しなければならないことが分かった。
・　寝技の攻防でも頸椎等の事故が起こりうることが分かった。また、事故を未然に防ぐための手立てについて理解ができた。
・　体格差、体重差、筋力差等を考慮した、重大事故につながらない指導の在り方。
・　ただ映像を見せるのではなく、その見せ方によって活動（よい例、悪い例）の幅が変わることが分かった。
・　寝技、立ち技での指導のポイント。

Ⅳ　授業の成果と課題について

【成果】

・　自分自身の研修になった。
・　日頃の学習訓練の重要性を痛感した。
・　１年生の５時間目（単元計画）であったが、技能は向上している。
・　安全面での配慮、段階的な指導等の面からも教師の準備や心掛けの大切さが分かった。
・　情報機器の活用が指導に大変効果的であることが分かった。
・　よい見本を見せることの大切さや効果が分かった。
・　仲間と協力して教え合う、学び合い、認め合う活動ができていた。そのため技能習得も早かった。
・　学習課題（取りに崩された方向に・・・）の達成に向けた学習展開であった。
・　実際に授業参観できたことが今後の指導に大変役立つと思う。
・　生徒が気付く学習展開だった。
・　指導の見通しがよく分かったので、生徒が安心して活動できていた。

【課題】

・　運動量の確保。
・　より安全性や技能を高めるための外部指導者の活用。
・　展開の時間配分。（補助運動・主運動・終末）
・　より安全性を高めるための、スペースの確保。（活動の向き、安全に対する見通し）
・　情報機器のより効果的な活用方法。
・　未経験者への更なる効果的な指導方法の模索。
・　研究の視点に立って考えたときの「互いに協力し合いながら・・・」は、何をもって「協力」と言えるかを明確に教師がもっておく必要があると思う。

Ⅴ　『授業づくり研究会』に関して

・　準備がしっかりできているので、話合いにもスムーズに参加できた。
・　研修会に至るまでのＷＧの苦労が至るところでうかがえた。
・　日々の取組の大切さが、研究会に生きていた。
・　グループ協議は少人数で意見が出やすく、授業者の巡回もあって細かな部分を聞くことができた。
・　指導の見直しとなる研究会だった。
・　体育を専門としていない教員にも、授業に対する配慮や姿勢が学べる研修会だった。

第３学年　Ｆ武道　「剣道」　　八幡浜市立双岩中学校
「攻防の楽しさを味わわせる授業」　　指導者：教諭　伊東　伸也
～簡易竹刀を用いた『応じ技』の指導を通して～

日　時　　平成28年11月９日（水）第５校時　14：00 ～ 14：50
場　所　　体育館
単元名　　武道（剣道）

１　単元目標

(1)　相手の動きの変化に応じた基本動作から、基本となる技や得意技を用いて、相手の構えを崩し、しかけたり応じたりするなどの攻防を展開することができる。
【技能】

(2)　剣道を通して、相手を尊重し、伝統的な行動の仕方を大切にしようとすること、自己の責任を果たそうとすることなどや、健康・安全を確保することができるようにする。
【態度】

(3)　伝統的な考え方、技の名称や見取り稽古の仕方、体力の高め方、運動観察の方法などを理解し、自己の課題に応じた運動の取り組み方を工夫できるようにする。
【知識、思考・判断】

２　指導観

(1)　生徒について

第３学年の生徒22名（男子11名、女子11名）は、第１学年から男女共習で保健体育の授業を行ってきており、活発で運動好きの生徒が多い。剣道の経験者はいないが、昨年、県教育委員会の地域連携指導実践校事業（外部指導者派遣）により、剣道外部指導者の授業を経験しており、基本的なしかけ技や応じ技について既に学習している。昨年度の剣道の授業の終わりには、自由に打ち合う試合形式の練習を行ったが、やみくもに打ち合う姿や、逆に遠慮し合って思い切り打ち込めない姿が見られた。男女共習や剣道具を装着することに対して抵抗感のある生徒はいないが、小手や胴を打たれることに恐怖感をもつ生徒はいる。また、筋力の弱い生徒の中には、竹刀が重く操作しにくいと感じている者もいる。

そこで、使用する道具や試合のルールを工夫し、安心して攻防を楽しむことのできる環境をつくるとともに、相手の構えを崩すことや相手の動きの変化に合わせることの大切さに気付かせる指導を行いたいと考えている。

(2)　題材について

剣道は、基本となる技や得意技を用いて相手と攻防を展開しながら、互いに「有効打突」を目指して相手の構えを崩して打ったり、受けたりして勝敗を競うスポーツである。

また、剣道は、「礼に始まり礼に終わる」と言われるように、特に礼法を重んじ

ながら競技を行うものであり、武技、武術などから発生した我が国固有の文化である。このような武道の学習に積極的に取り組むことで伝統的な考え方を理解し、練習や試合を通して、相手を尊重する態度を育てたい。

一般的にこれまでの剣道の学習では、基本動作や基本となる技の指導に時間を費やすことが多かった。そのため、学んだ技を試合で生かすための学習が不十分となり、生徒が攻防の楽しさを十分に味わえないまま学習が終わってしまうこともあった。この他にも、安全面の配慮、剣道具装着のための時間確保や面装着時の指示の出し方にも課題がある。これらの課題を考慮し、学習形態や教材・教具を工夫することにより、生徒の主体的な活動を中心とした授業が展開でき、剣道の攻防の楽しさを味わわせることができると考える。

(3) 指導について

今回の授業は、自由な攻防を楽しむための前段階として、「応じ技」の学習を行う。竹刀よりも軽く扱いやすい簡易竹刀（塩化ビニールパイプと発泡スチロール製）を用いることで、竹刀の操作スピードを上げるとともに、痛みに対する恐怖感を取り除き、生徒が思い切って技を出すことのできる環境を準備する。

単元前半の授業では、面・小手・胴打ちといった基本打突と、相手の構えを崩して攻撃する「しかけ技」の指導を中心に行ってきた。そして後半の授業では、「応じ技」の指導を行い、実際の攻防へと段階的につなげていくように計画している。

生徒は、これまでに大きく振りかぶって面や小手を打ってくる相手に対しての応じ技を考え、練習を行った。その後の判定試合では、応じ技のみを評価の対象として判定を行った。今回は、より実際の試合に近付けるために、しかけ技の面打ちにも得点を付ける。また、面の打ち方についても、より実戦に近付けるために、竹刀を払ったり、小さく振りかぶって素早く打ち込んだりしてもよいことにした。これまでよりも難しい状況の中で、応じ技を成功させるためには、試合を想定した練習を数多く行うことが大切だと考える。そこで、グループのメンバー全員と繰り返し練習できる環境を作りたい。また、その際、適宜グループでの話合いの場を設け、「思考→実践」を繰り返し行わせたい。

試合では、グループ全員で話し合い、両チームの得点を付けさせることにした。そのために、評価のポイントを明確にして得点表を作った。一人一人の生徒が、評価のポイントを正しく理解することで、正しい判定ができる力を身に付けさせたい。また、得点を競い合う中で、気・剣・体をさらに意識させるとともに、攻防を楽しむための技能を向上させたいと考えている。

授業の導入や技の確認をする場面では、ＩＣＴ機器を活用して生徒の意欲を高めるのに役立てたい。また、その一方で、友達との関わりを大切にしたグループ学習を効果的に活用し、相手を尊重しながら、より主体的に学び合おうとする意欲・態度を育てたいと考えている。